

令和元年 6 月 26 日
磯部千枝・柏田三千代

日本国際情報学会
第 7 回 愛知 (PH) 研究部会 勉強会 報告書

【日程】 令和元年 6 月 15 日 (土) 12:30~16:30

【場所】 赤坂 アークヒルズ

【参加者】 9 名

【内容】

懇親会 (昼食)

愛知 (PH) 研究部会 部会長 磯部千枝さんからの挨拶

発表 坊農豊彦さん 「地区防災計画からはじめる地域のまちおこし」

草野純子さん 「AI 時代におけるタッチケアの意義考察」-ケアリングとの関連から-

日本国際情報学会 副会長 佐々木先生からの総括

【総評】

第 7 回愛知 (PH) 研究部会の勉強会は、今年も美味しい料理を堪能しながら、参加者が互いに近況報告を語り合い、懇親会から始まりました。部会長の磯部千枝さんの挨拶の後に、2 名による発表内容に沿って皆で議論しました。

まず 1 人目、坊農豊彦さんによる「地区防災計画からはじめる地域のまちおこし」では、トップダウン型の「地域防災計画」に対し、地域住民が主体となったボトムアップ型の「地区防災計画」の特徴と意義についてです。大規模災害時には、自らの命は自分で守る「自助」、隣近所が助け合って地域の安全を守る「共助」、行政による救助活動や支援物資の提供などの公的支援「公助」の 3 つが必要であると言われていています。しかし阪神淡路大震災や東日本大震災時に、地震や津波によって、本来被災者を支援すべき行政自体が自ら被災してしまったことによる行政機能の麻痺という、大規模広域災害時における「公助の限界」を知った教訓から、災害から生命や財産を守るためには、特に災害直後の「自助」が必要であり、地域・企業・ボランティア等の「共助」が不可欠になること。また、地域住民が地区防災計画に取り組むことにより、「自分たちの町を見直す」きっかけとなり地域の絆が深まることや、事情に通じた住民ら自らによる地域の特性に応じた対策が、市町村の「地域防災計画」に組み入れられるという事実上のボトムアップ型対策と地域の町おこしを両立させることから、地区防災計画は「アジャイル型防災計画」とも表現できると締めくくられました。

次に、2 人目の草野純子さんによる「AI 時代におけるタッチケアの意義考察」-ケアリングとの関連から-と題した発表に移ります。近年 AI が普及し、医療や看護業界にも AI は導入されてきています。しかし、新しい発想や価値を生む仕事、人間の心や精神活動に深く関係する分野、創造性、協調性が必要な業務、抽象的な概念を整理したり、イノベーションを創出したりする職業、他者とのコミュニケーションが求められる仕事は、そう簡単に AI やロボットに置き換わることはないと考えられます。そこで最近では心理的・生理学的効果やケアの方法以外に、人間関係・ケアリング・スピリチュアル・コミュニケーション関連の研究が増加していることに着目しました。身近な人々とのつながりによる「絆」と「癒し」の基礎となる生体物質はオキシトシンですが、この物質はストレスを癒し、体内で発生する痛みや炎症も抑えてくれます。それを脳内で作るた

めには、タッチや人に親切にすることが有効であることも分かっています。AI が普及したとしても、患者の苦痛を拭い、ケアする者とケアされる者との相互の癒し・癒される関係づくりから、相互の成長を促す「人間同士の関係性」をよくする行為として、触れる＝脳の出先機関としての皮膚に働きかけるケアが重要性を増していくという内容でした。

最後に佐々木健先生からの総括では、今後の研究への取り組みについての指導が行われ、次の研究へとつなげられる勉強会になりました。



以上